

桜井小環境委員会 トンボ池は宝物

いたち川沿いの稲荷森に、栄土木事務所の皆様にトンボ池を造っていただいてから1年半が経とうとしています。瀬上市民の森トンボ池よりもずっと桜井小に近く、総合的な学習の時間や、生活科・理科等でトンボ池を活用する機会もふえました。

本校では、環境委員会を中心に、トンボ池でのザリガ二釣りの企画やプールのヤゴ救出大作戦などを計画し実践してきました。「トンボ池のピオトープ化を実現するにはどんな手だてがあるのか・・・」という願いが、今の私たちの課題です。



愛護会の活動報告(6)

実は、今年の夏、トンボ池には動物性プランクトンが発生し、その死骸は池の水を汚染しました。また、秋には、植物性プランクトンが発生し、この青藻を取り除いたほうがいいのか、取らないほうがいいのかは、私たちの大問題となりました。

そんな時、相談にのって下さったのが栄土木事務所の和久井さんでした。

「青藻はね、ヤゴの赤ちゃんや小さな生き物たちの赤ちゃんの隠れ家になっているんだよ。だから、赤ちゃんが大きくなる春まで待ってあげて、それから藻を取ってもいいんじゃないかな。」

私たちは「汚い藻」と考えていたけれど、小さな生き物たちには「お家」だったのですね！藻のなかをじっとのぞいて見てみれば、何とたくさんの命がうごめいていることでしょう！

桜井小学校は、今年20周年を迎えました。私たちは全校生徒で記念のカプセルに思い出の品をつめました。環境委員会の思い出の品、それはトンボ池です。

桜井小学校

みざしせん いたち川右支川水辺愛護会より

当愛護会の発足は、平成12年10月であり、会員数は12名であり、その後会の活動に賛同された方が3名おられます。

私たちが川掃除及び除草を行っているのは、いたち川上流の右支川(別名猿田川)であります。その規模は延長1,800m(上流起点上口橋~下流小いたち橋・区役所裏)、比較的川巾が狭く6.0mから3.0m程度であります。

右支川は現在、下流・中流は、柏陽、鍛冶ヶ谷町、中野町、上郷町等の住宅街を貫通しているが、その上流周辺は、今から30から40年前は、田んぼがあって、秋には稲穂の波がゆれていた頃を容易に想像できます。もちろん水質は良好であり、ドジョウなどの魚が多く棲んでいたものと思われます。

今では、田んぼはなく、畑の耕作のみを目のあたりにするのみであります。6月上旬頃はホタルを見物する人々で賑やかになっているところもあります。右支川の源流と思われる円海山を起点とした後背地には、何百ヘクタール規模の森林などの自然があります。

私たちは残された自然環境を守るため、既に存続している「いたち川と親しむ会」と他の水辺愛護会の皆さんとともに、川掃除などの活動を行っております。

その内容は、川掃除は毎月1回、第一日曜日、掃除場所は、あらかじめ年間計画を立ててゴミの多い箇所を

重点的に行っています。草刈りは、6月から11月の間に2~3回実施しています。集積されたゴミ、草等は、その箇所から栄土木事務所へお願いし、運搬して戴いております。

さらに、右支川の浄化活動だけでなく、川岸などにパンジー等の各種草花を植えるなど、年間計画により四季を通して川周辺の美化に努めています。これらの活動は、地域住民、一般の通行のみならずから非常に喜んで戴いております。

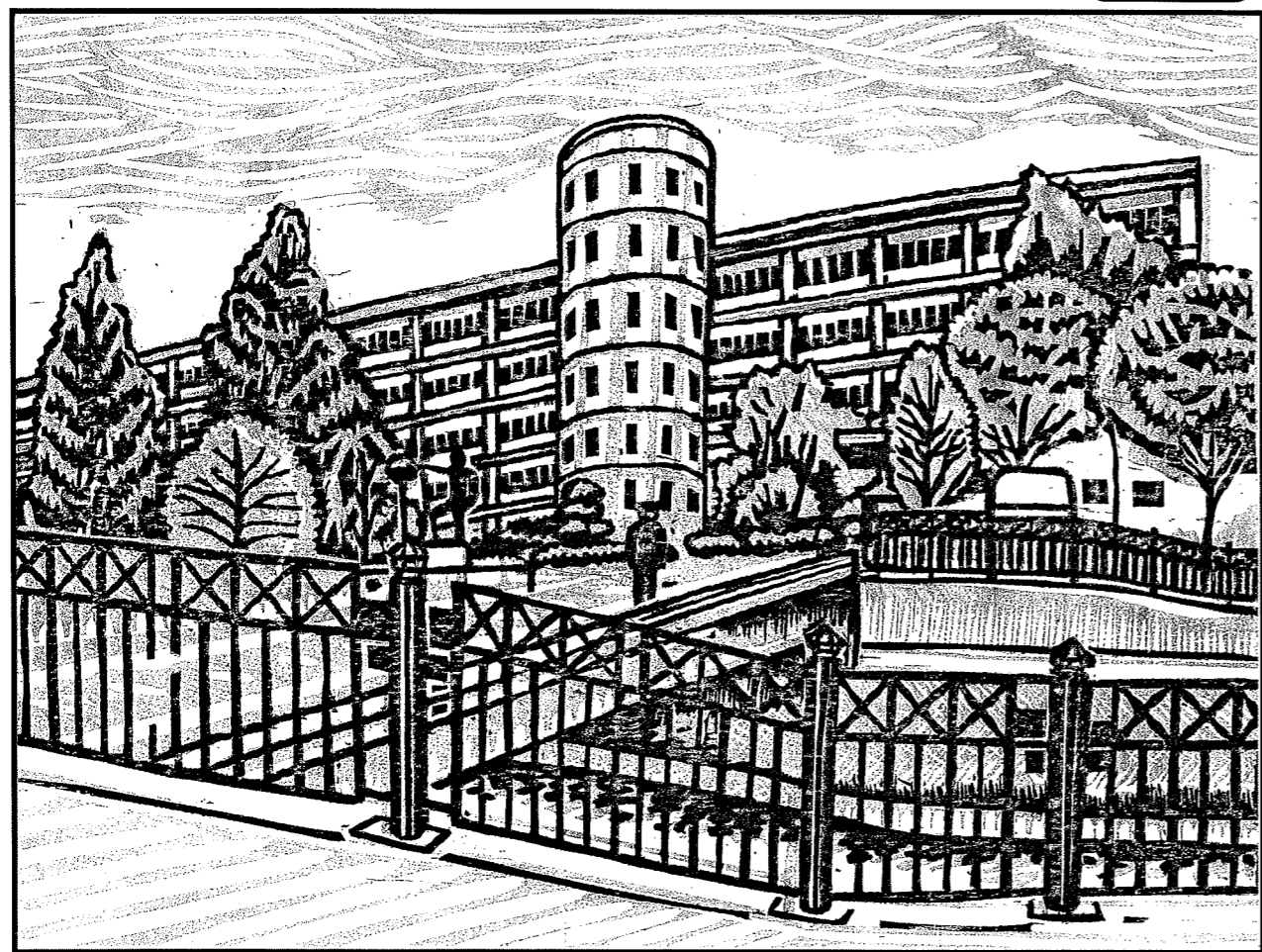
夏期の行事として、「いたち川と親しむ会」とともに、8月、いたち川(大いたち橋付近・区役所裏)において「筏祭り」(参加120名程度)盛大に挙行しています。この行事は地元小学校生徒、地域住民、幼児、老若男女が参加され、大変喜んで戴いております。当会の運営活動を積極的に推進するため、春の花見の会、秋の芋煮会等々、地域の住民との交流を図り、さらに懇親を深めて参りたいと思っております。

今後は、地域住民のご支援、ご協力により、川の浄化の促進を計るとともに、その周辺の美化にも努めて、自然が蘇生し、私たちが少年の頃のように、山に小鳥が舞い、小川では小魚釣りや川泳ぎなど、楽しく遊べるような環境に近い将来にあることを祈念してやみません。

(庄司修一)

いたちかわらばん

鮎川・狹川・川原番・瓦版 冬号



版画 宗森英夫

警察学校橋

美しいいたち川を目指して、多くの人たちがさまざまな形で参加し活動しています。そんななか、とても喜ばしいニュースをひとつ紹介致します。月一回の川掃除を行っている水辺愛護会に、若さあふれる力強い応援の人たちが加わりました。それは警察学校の学生さんたちです。

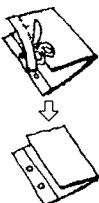
学校からは、「ボランティア活動をさせたい。それも地域の人たちと一緒に作業をする事によって、人とのコミュニケーションが上手にとれるよう、また自然環境の大切さについても考えさせたい。」との主旨からの参加とうかがってまいりました。後日庶務課長さんをお訪ねし、学生さん達の感想を聞かせていただきました。学生さん達は、川に対して以前は特別に関心があった様子もなく「鯉がいるくらいだからきれいな川なのだろう。」といったくらいだったのが、清掃後は「ちょっと大変だったけれど皆さんがとても喜んで感謝してくれましたので、やり甲斐があつて良かった。」と言って下さったそうです。

地域の人たちに親しまれ頼りとされるお巡りさんになられる学生さん達です。これからも各クラス(二十名)が順次参加して下さることで、新しい出会いが楽しみです。自然にも人にも優しく出来る人の輪が少しずつ広がっていき、学生さん達の運んでくれる若い風が会に広がり活気を与えてくれるように。 (あ) (en)

広がってきた輪 警察学校の学生さんたち

切りとり線

この部分を切り取ってファイルすると便利です。



発行：狹川OTASUKE隊(いたちかわおたすけたい)

OTASUKE隊事務局：栄区役所区政推進課企画調整係 〒247-0005 横浜市栄区桂町303-19
TEL 045-894-8331 FAX 045-895-2260
栄土木事務所下水道係 〒247-0007 横浜市栄区小管ヶ谷1-6-1
TEL 045-895-1411 FAX 045-895-1421
(お便り・お問い合わせはこちらまで)

発行年月
2002年2月

(通刊16号)

笠間地区周辺の昔話を、笠間町田立地区に在住の田中利二さんに伺いました。

現在の長沼町、田谷町、金井町付近は大正9年には耕地整理が行われ、水田を中心とした農業が行われてきました。

畑作物は、きゅうりやトマト、大根等の野菜を収穫し、リヤカーで町に引き売りに行くのは女の仕事とされ、唯一の現金収入でもありました。

戦後、柏尾川沿いは水がきれいでも豊富にあることから、稲作から鯉や金魚、食用蛙等の養殖業が行われました。“アメリカザリガニ”は、食用蛙の養殖用のエサとして輸入したものが日本全土に繁殖したということでした。

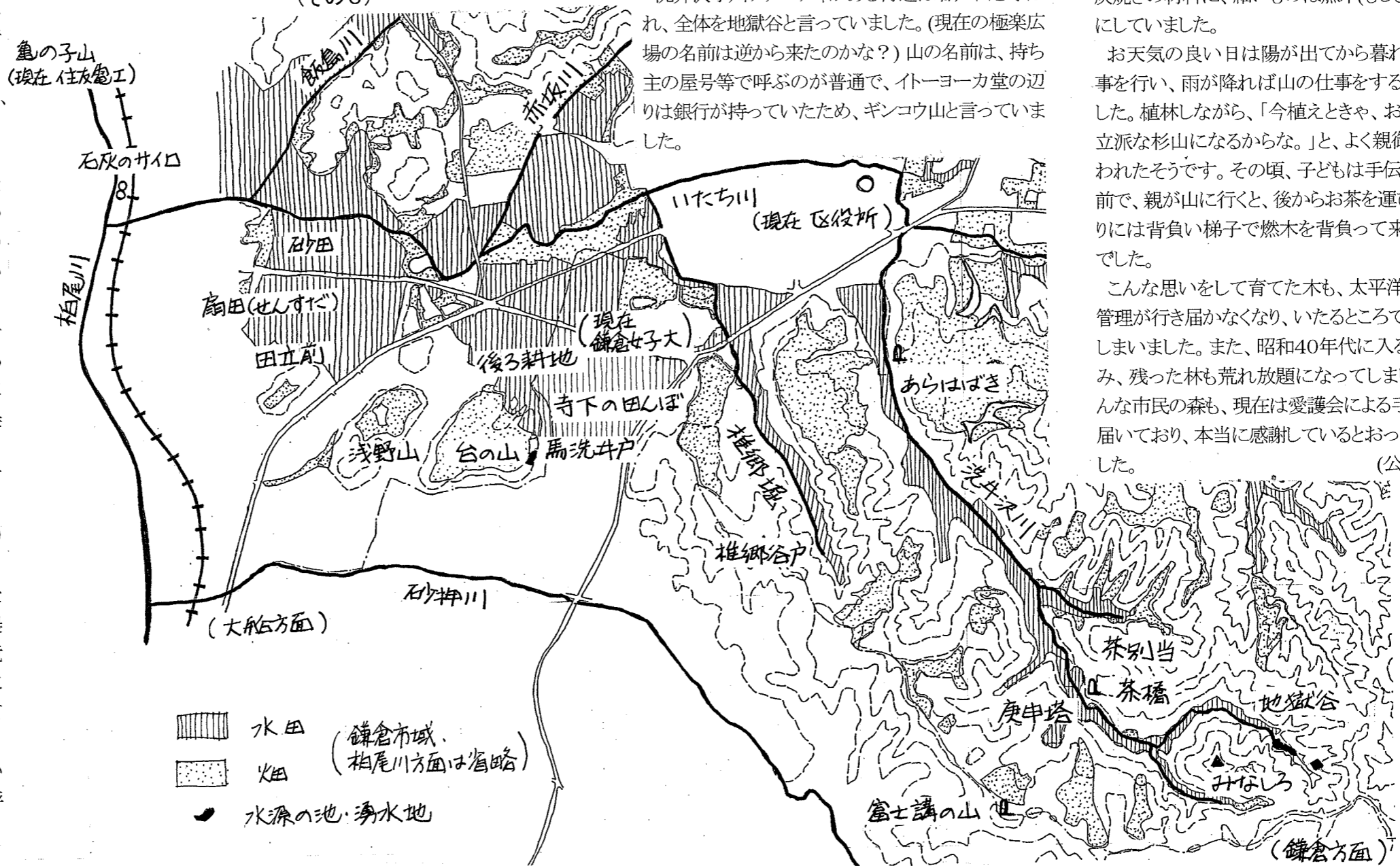
昭和30年代になると工場の進出によって、亀の子山(現在の住友電工)は削られ、周辺の水田は埋められて工場となりました。笠間地区も工場や住宅地に変貌し、地元の人たちも工場に働きながらの兼業農家となったため、農業は衰退したのです。

笠間のバスセンター周辺は小高い山が連なっていました。石灰岩を採取した跡地が住宅地となり、いたち川と柏尾川合流部にある2基のサイロが在りし日の面影を残しています。

現在の笠間3丁目、4丁目一帯は田立(たりゅう)と呼ばれています。昔この地域の水田は沼地で、農民は大変苦労していました。そこで、みんなで「田竜舞」を神に捧げると竜巻が起り、みごとな田んぼに一変したという話からこの地名が付いたと言われていました。

その他に「扇田(せんすだ)」、「砂田」と呼ばれている地域がありますが、農地全体の地形や地質から呼ばれてきたと言われています。(ミジンコ、クリオネ)

昭和20年代～30年代の
農業最盛期における
いたち川流域の水田・畑耕作状況
(その3)



公田地区の昔話や荒井沢の暮らしについて、長沼忠治さんに伺いました。

洗井沢小川アメリティがある付近は谷戸田と呼ばれ、全体を地獄谷と言っていました。(現在の極楽広場の名前は逆から来たのかな?) 山の名前は、持ち主の屋号等と呼ぶのが普通で、トヨーカ堂の辺りは銀行が持っていたため、ギンコウ山と言っていました。

この地域には、約50戸の農家があり、農業と林業が行われてきました。農業は、稲作と畑作を、林業は植林と下刈りを行い、伐採した雑木は太いものは炭焼きの材料に、細いものは燃木(もしき)として燃料にしていました。

お天気の良い日は陽が出てから暮れるまで畑仕事を行い、雨が降れば山の仕事をすることが日課でした。植林しながら、「今植えときゃ、お前の代には立派な杉山になるからな。」と、よく親御さんから言われたそうです。その頃、子どもは手伝うのが当たり前で、親が山に行くと、後からお茶を運びに行き、帰りには背負い梯子で燃木を背負って来るのが仕事でした。

こんな思いをして育てた木も、太平洋戦争のため管理が行き届かなくなり、いたるところで木が枯れてしまいました。また、昭和40年代に入ると開発が進み、残った林も荒れ放題になってしまいました。そんな市民の森も、現在は愛護会による手入れが行き届いており、本当に感謝しているとおっしゃっていました。(公田のトキ子)

切りとり線

リレートークその十五
いたち川のつばざき

今日の僕はどうだい？ちよつとい男になつたらう？水辺愛護会の人たちが僕を勇前にしてくれたんだ。僕の手ではどうにもならないプラスチックや金属類のゴミを綺麗に掃除してくれたんだ。おかげで僕の気分は最高だ。

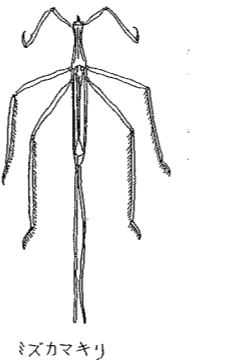
僕を頼って生きている生き物たちも喜んでるよ。何よりも嬉しいのは、「ミミ」を流してくれるな。いつも文句をいわれている海さんに胸を張れることなんだ。

だけど、今日はこんなに綺麗になった僕だけ、ひと月も経てばまたボランティアの人たちのお世話にならないと、僕を好きになつてくれる人たちに顔向けもできないほど汚れてしまつて悲しいな。空瓶や空き缶をたくさん入れたビニール袋を無造作に投げ込んでいく人や、壊れた自転車の車輪をハンマー投げのように投げる人がいてね。なんで、こんなに僕を苛めなければならぬのかなあ？

そつ、こんなこともあったよ。犬の糞を拾ったままではいけないけど、人が見ていないのをいいことに、糞の入ったビニール袋を僕に投げつけた愛犬家がいんだだよ。「おい、おい、マジか！？」僕は思わず叫んだね。

それに、ベンチのある岸辺ほど空の弁当箱やペットボトルが捨ててあるのはどういふことなんだ！良心を無くしてしまつたとは思いたくないけど、僕には不可思議なことなんだ。「ミミ」は川に捨てればいとも思っているんだね。きつと。だけど、そんな人はごくわずかだ。でも僕には知ってるよ。ホントのことはいえね、誰の世話にもならないでいつてもいい男がいるのが僕の夢なのさ。(ティンギー)

いたち川周辺の生き物⑤
水中から管を出して呼吸するミズカマキリ



ミズカマキリ
川のような流れのあるところには棲まないが、池や水田などによく見かける水生昆虫にミズカマキリがいる。水草などにまぎれて獲物を待ち伏せて狩る姿がカマキリそっくりなので、名付けられた。前肢の先が小さな鎌のようになっているのも本物のカマキリに似ている。

翅を持っていて、天気の良い日には、水中から飛び出してくつこともあるが、水中で生活していることが多い。腹の先に体長と同じか、それ以上長い呼吸管がついていて、その管をシュノーケルのように水面に出して呼吸している。尾についた長い呼吸管は、丸い筒でなく、細い2本のさやが合わさったものである。卵にも呼吸管が付いていて、水につかっても呼吸できるようにしている。

カマムシ目タイコウ子科の昆虫で、成虫の大きさは四〇〜五〇mmある。不完全変態なので幼虫も似たような形をしている。成虫のまま越冬し、翌春、水辺のコケや土の中に産卵する。

成虫は色や形が枯れ枝にそっくりなので、泥水の中に潜っていると、なかなか見分けがつかない。他の昆虫やオタマシヤクシ、小魚などを餌にしている。似たような種類にヒメミズカマキリがいるが、ミズカマキリより小型で呼吸管が短い。呼吸管の長さは、頭から尻までの長さの約2/3。全体の大きさは二四〜三三mmくらい。ミズカマキリと違って、川の水のよみにもいる。餌はおもにアメンボ。

(SPTC)